

ハイ デイ (第七回)

東京女子高等師範學校教授

津 田 芳 雄 譯

六、新しい生活

フランクフルトの廣いお家では、ゼーゼマン氏のお嬢さんの病身なクララが、いちんち車つきの寢臺の上にねたつきりて、一寸動くにも寢臺ごみ部屋から部屋へ押して行つて貰ふさいふ、不自由な退屈な毎日を送つてゐた。今もクララは、いつも先生からお勉強を習ふ。立派な本箱の竝んだ美しいお部屋に寝て、瘦せた青白い小さな顔を時計に向けて、弱々しいやさしい青い眼を見開いて、ぢつと針の進みを見つめてゐた。今日に限つて時計の針がいやにのろ／＼と動くやうに思はれ、いつになくぢれつたさうに訊ねるのだつた。

「まだですの？ ロッテンマイアさん」

ロッテンマイアさんは、ケープのやうな大きな襟のついた不思議なだぶ／＼の服を着て、高い圓屋根のやうな帽子をかぶり、いかめしく傍の仕事

机に端坐して熱心に刺繡をしてゐた。クララのお母様がすつ／＼前に亡くなり、お父様は御用で始終留守勝ちなので、長年の間、家の切りまわしから召使の監督一切を、お父様から委せられてゐるのである。たゞ一つ。何事によらずクララに相談し、すべてクララの意にそむかないやうにさいふ條件づきで。

クララが又待ち切れなくなつて二度目の催促をしてゐる時、デーテミハイデイは玄關に著いた。デーテは折よく馬車から降りて來た馬丁に、ロッテンマイア様にお目にかゝりたいのですが、もう遅いでせうかまじつねた。

「それあ、わたしは知らん。玄關のベルを鳴らし、セバスチャンをお呼び」

馬丁はぶつくさ云つた。

デーテがベルを鳴らすと、下男のセバスチャン

が降りて来た。

「ロツテンマイア様にお目にかゝりたいのですが、もう遅うございませうか」

デーテは又たづねた。

「それあ、わたしは知らん。その、こつち側のベルを鳴らして、女中のティネットをお呼び」

さう云つて、セバスチャンはさつさつ引つ込んだ。

デーテは又ベルを鳴らした。今度は頭のとつぺんに眞白な帽子をのつけた女中のティネットが、人を馬鹿にした様な顔をして出て来た。

「なんです？」

ティネットは階段の一番上に立つたまゝぎなつた。デーテは又同じこみをたづねた。ティネットは引つ込んですぐ又現はれるこ、上から呼んだ。

「お上んなさい、お待ち兼ねよ」

デーテミハイデイは階段を上つて、本箱のあるお部屋へ這入つた。デーテはしきやかに入口際にひかえ、こんな珍らしい所につれて來られては、又何をやり出すかされないハイデイの手を、しつかりと握まへてゐた。

ロツテンマイアさんはしつ／＼立ち上つて、

新しくお嬢さんのお相手になる子供の方へ進み寄つた。一見して、あまり氣に入らない様子だつた。ハイデイは粗末な毛織のきものに、型のくづれた古い麥藁帽子をかぶつたまゝこの人の高い塔のやうな帽子を、不思議さうにまじまじ見上げてゐた。

「お名前は何ていひます」

ロツテンマイアさんは、しばらくしげ／＼子供の様子を調べてから、かう云つてたづねた。ハイデイはなほもまぢろぎもせず見返しながら、鈴のやうなよくひびく聲で答へた。

「ハイデイよ」

「なになんですつて？ それは洗禮名ぢやないでせう、教會で洗禮を受けた時、何てお名前を付けていたりました？」

「そんなの、知らないわ」

「何て返事の仕様でせう。」

ロツテンマイアさんは頭を振りながら、デーテに云つた。「一體この子は馬鹿なの、それさも生意氣なの？」

「ほんたうに失禮ばかり申し上げまして」デーテはこつそりミハイデイを小突いた。「決して馬鹿で

も生意氣でもないのですが、ぢきに思つたことをズバ／＼と申してしまひますので。何しろ人さまに馴れません、生れて初めて立派なお屋敷に上つたものでございますから、お行儀をちつとも存じませんので。でもこの子はお仕込み下さいますれば素直にちきに覺えます。この子の洗禮名は、私の亡くなりました姉で、これの母親になりますものゝ名をこつて、アデライデと申します」

「まあそれで、名前らしくなりました。ですけれどもね、デーテ、實は私はびつくりしてゐるんですよ。あんまり小さいぢやないの。たしか私はお嬢さまのお勉強から何からすつかりお相手出来る、お嬢さまと同じ位の年の子供を云つた筈ですよ。お嬢さまは十二におなりだが、その子はいくつなの？」

デーテは例の雄辯な調子でまくし立てた。「私もはつきりこは覺えて居りませんのでございませすが、もちろんお嬢さまよりは少し小さいかござ存じますが、そんなに下ではございませせん。しかこは申し上げ兼ねますが、たしか十くらゐでございませす」

「おぢいさんは八つだつて云つたわよ」

ハイデイが口を出した。デーテは又小突きまはしたが、子供には何のこゝもやらさつぱりわからず、すましたものだつた。

「何ですつて、たつた八つですつて！」

ロツテンマイアさんは怒つて叫んだ。「四つも下ぢやありませんか、そんな小さな子が、何の役に立ちますか！そしてあんたは、今まで何を勉強したの？　そんな本を習ひました？」

「何にも習はないわ」

「エッ何ですつて？　それぢやさうして字を讀むことを教はつたの？」

「字なんか習はないわ、ペーテルだつてよ」

「おや／＼、字も讀めないのですつて？　ほんごうに、そんなこゝもつて、あるかしら。それぢや一體、何を勉強したの？」

「なんにもしないわ」

ハイデイはおめす臆せず正直に答へた。

ロツテンマイアさんは、呆れ返つてもものも云へなかつたが、やつこ取り戻すこゝ、デーテに喰つてかゝつた。

「これぢや全く話がぢがふぢやないの。何だつてこんな子を連れて來たのです」。

しかしデーテもなか／＼負けてはゐなかつた。

「あなた様が一風變つた子をミ仰せられましたから、これ以上うつつつけの子はなほ存じましてわざ／＼連れて參つたのでございます。もう私の方の奥様もお待ち兼ねでいらつしやいませうから、これで失禮いたします。いづれ又、様子を見に伺ひます。」

さう云つて一禮するに、デーテは部屋を出て階段をかけ降りた。ロツテンマイアさんはほんやり突立つてゐたが、あわててあゝを追ひかけた。この子をおいて行くつもりならば、もつこいろいろ／＼訊きたいことがあるのであつた。

ハイディは這入つて來た時のまゝ入口に立つてゐた。クララはさつきから一言も云はずに見てゐたが、この時ハイディにおいで／＼をした。

「こつちへいらつしやいな」

ハイディはそばへ行つた。

「ハイディつて呼ばれるのミ、アデライデつて呼ばれるのミ、こつちがすき？」

クララはたづねた。

「わたし、ハイディのほかの名前なんか、ないわ」
ハイデは即座に答へた。

「そんならいつもさう呼ぶわね。その方が似合ふわ。變つた名前ね、だけさあんたつて子もずる分變つてゐるわ。いつでもさうやつておかつぱにしてたの？」

「ちよつと」

「フランクフルトへ來るの、うれしかつた？」

「いゝえ、わたし明日はおうちへ歸るのよ。おばあさんに白バンをお土産にもつてつてあげる」

「まあ面白い子ね。あんたはね、あたしのうちで、あたしと一緒にお勉強する爲に、わざ／＼連れて來られたのよ、あんたが何も習つてゐないのだつたら、新しいことを習はなきゃならないから、お勉強もこれからは面白くなるかも知れないわね。今までは、ミつても退屈だつたのよ。先生が朝十時にいらしつて、二時までお勉強なのよ。先生だつて時々近眼みたいに本を近よせて、こつそり欠伸をなさるわよ。あたし知つてるの。ロツテンマイアさんだつて、御本に感動してハンカチで涙をふくまねをするけれど、あれも欠伸よ。あたしだつて、ミても欠伸が出さうになることがあるけれど、一生懸命がまんしてるの。でないに、もしロツテンマイアさんに見付かるに、あたしが病

氣だかつて、大急ぎで肝油をのませるのですもの。あたし肝油、大きらひよ。だけごあんたが來れば、すつこ面白くなつてよ。あたしはあんたが習つてゐる間、寝て聽いてゐられるのですもの」

ハイディは、字を習ふなんてさうかな、こいふ風に頭を振つた。

「だめよ、ハイディ。字は誰だつて習はなきやならないのよ。先生はさても親切で、決してお怒りにならないし、何でも説明して下さつてよ。だけご、初めは何のこごだかわからなくつても、決して質問しちやだめよ、餘計にこんがらかつて、わからなくなるから。も少しして自分でわかる様になつたら、先生の仰しやるこごが、わかるやうになつてよ」

ロツテンマイアさんは、もぎつて來て、いら／＼しながら部屋中をあちこち歩きまはつた。デーテにもつこ詳しく話をして、こんな子供は何の役にも立たないこごを諷して連れて歸らせようと思ふのに、デーテはもうそこいらにゐないのだつた。さうなるさ、ハイディを呼びにやつたのは自分であるから、責任があるし、一層腹が立つて、食堂で、もう出來上つた晩御飯のお膳立てに手落ちに

はないかご、なほも調べてゐたセバスタチャンつかまへて、當り散らした。

「何を考へ込んでゐるんだね、ぐづく／＼しないで早くおやりよ。今日の間に合やしな」

それから今度は女中のティネットを呼び立てた。あんまり不機嫌な聲で呼んだので、女中はいつもより餘計しやなり／＼澄まし返つて出て來て、つん／＼してゐた。さすがのロツテンマイアさんも吐り飛ばすこごが出來なくなつて、一層いら／＼するのだつた。

「今來たあの子の部屋をちやんこしておきなさい」やつこのこごでかんしやくを押へて云つた。「もうすつかり出來てゐるのだけれご、まだ塵が拂つてないから。」

「ありがたい御用でございます」

ティネットは馬鹿にしたやうにさう云つて、向ふへ行つてしまつた。

セバスタアンはクララのお部屋と食堂との間の折扉を、むしやくしやまぎれにわざこがたびし大きな音を立てて開け、クララの寝椅子を押してつれて來た。ハイディはそばへ來て、しげ／＼とセバスタチャンの顔を見つめてゐた。

「なんだつて人の顔を、さうじろく見てるんだ」

セバスチャンは怒鳴りつけた。

「あんたね、さてもペーテルに似てるわ」

丁度這入つて来たロツテンマイアさんは、この様子を見てびびくりした。

「あらうごさか、あの子は下男にまるで友達みたいに話してゐる。あんな子さ思ひもよらなかつた」

セバスチャンは、クララを寝椅子から助け起して、食堂の椅子に坐らせた。ロツテンマイアさんはクララの側に坐つて、ハイディに向ひ側に坐れし合圖をした。廣い食卓に、たつたこの三人が坐るきりなのだつた。セバスチャンはお給仕してまはつた。ハイディはお皿のそばにおいしさうな白パンを見付けるさ、うれしさうに眼を輝かしながら、ぢつさお行儀よく坐つてゐて、セバスチャンがお魚のお皿を持つて自分の側に来るさ、

「あれいたゞいていゝの？」

さたづねた。セバスチャンがペーテルに似てゐるのが、なんさなく心易く頼りになるやうに思はれたのである。セバスチャンはちらろツテンマイ

アさんの方をぬすみ見ながらうなづいた。ハイディはすぐに巻パンを取つて、ポケットにしまひ込んだ。セバスチャンはも少しで噴き出しさうになつたが、やつこ場所柄を思つてがまんして、黙々として不動の姿勢のまゝハイディの傍にひかえてゐた。給仕の身分さして、ハイディがお魚をさつてくれるまでは、口をきくごさも、向ふへ行つてしまふごさも許されなかつたのである。ハイディはいつまでもセバスチャンが自分のそばに立つてゐるのを不思議さうに眺めてゐたが、

「わたし、それもいたゞくの？」

さきいた。セバスチャンはうなづいた。

「そんなら、さつて頂戴な」

ハイデはすまして自分のお皿を見つめながら云つた。セバスチャンは又噴き出しさうになつて、捧げてゐたお皿がぶる／＼さふるえ出した。

「お皿はテーブルの上において、あさから來ればよろしい」

ロツテンマイアさんはこわい顔をして云つた。セバスチャンは直ちに出て行つた。

「あんたさいふ人は、アデライデ、お行儀の一番はじめから教へなきやならないのだね」ロツテン

マイアさんは溜息をつきながら云つた。「まづ第一に、食卓のお作法だが」云つて、細々それを云つて聞かせ、「それから、食卓でもここでも、何か喧附ける時とか、用事があつてものを訊く時の外は、セバスチャンに口をきいてはいけないうですよ。まるでお友達みたいにあんなに心易さうに話すものぢやありません。ティネットにだつてですよ。私を呼ぶには外の人が呼ぶ通りに呼び、クララさまのここはクララさまに伺つて、その通りにお呼び申し上げなさい」

「もちろん」クララ「ご呼ばい」のよ
クララが云つた。

それから、一般の行儀作法についてのお談義が長々まついた——朝起きるここから夜寝るここ、部屋の出入り、戸の閉め方、ものの片付け方に至るまで——その間に、ハイデイの眼はだん／＼塞がつて来た。何しろその日は朝五時前に起きて長道中をして來てゐるので、椅子にもたれてぐつすり眠り込んでしまつた。ロツテンマイアさんはやつ／＼お説教を終り、

「私の云つたことをよく覚えておくのですよ、アデライデ、わかりましたね」

云つた。

「ハイデイはもうさつ／＼に寝込んでゐてよ」クララがをかしさうに云つた。クララにはこんな面白い食事は、近頃めつたにないことだつた。

「あゝ全くこんな厄介な子供はやりきれない」

ロツテンマイアさんは腹立ちまぎれにけた／＼ましくベル鳴らしたので、セバスチャンもティネットも、びつくりして飛んで來た。しかしそんな物音を立ててもハイデイはなかく／＼眼を覺まさず、二人はやつ／＼のここで、いくつもの部屋を通りぬけた端にあるハイデイの寢室へつれて行つてねかせたのだつた。

七、ロツテンマイアさんの大閉口

フランクフルトでの最初の朝、目を覺ました時、ハイデイは自分がどこにゐるのか、ちよつ／＼見當がつかなかつた。それから目をこすつてあたりを見まはす／＼自分は廣いお部屋の片隅の、高いまつ白なベッドにねて居り、長い長いカーテンから朝の光りがさし込んでゐるのだつた。窓のそばには大きな花模様をついた椅子が二つあり、それからそれ／＼同じ模様の長椅子も、その前の圓テーブルが目に入つて來た。隅／＼には洗面臺がついて居

り、その上にはハイディの今まで見たこともないやうなものが色々載つてゐた。それから急にハイディは自分が今フランクフルトに来てゐるのだといふことを思ひ出した。するに昨日の出来事がすっかり思ひ起され、あの家政婦のロツテンマイアさんのお説教が、——尤も終りの方は眠つてしまつたけれど——だん／＼はつきりと思ひ出されて来た。ハイディは飛び起きて著物をきかへ、それからあちらの窓へ、こちらの窓へ走りまはつた。外の空や田舎の景色が見たかつたのである。こんな

大きなカーテンの内側に閉ぢこめられては、まるで籠の鳥のやうな窮屈な思ひがした。だがカーテンはなかく／＼重くて開けられないので、ハイディは下から這ひ込んでやつミ窓際へ出た。こころが窓は又、とても高くてハイディの頭がほんの少し窓闕から出てやつミのぞけるだけだつた。そんなにまでしてのぞいても、ハイディの見たいものは何も見えなかつた。この窓へ行つて見ても、見えるものは壁ミ窓、壁ミ窓、壁ミ窓——ハイディはこわくなつてしまつた。朝はまだ早かつた。ハイディは早起きのくせがついてゐて、朝起きるさまづみんながぎんな様子をしてゐるか、空は青いか、

もうお日様は山の上によつたか、樅の木は枝をゆすつてゐるか、お花はもう目を覺ましたかしら、いつも見に行つてゐたのである。小鳥が初めて立派な籠に入れられた時、大空へ飛び出さうミ、ばた／＼と出口を求めゐるやうに、ハイディはあち／＼と窓をかけたあき、もつミ向ふのきこかには、あんなに見たい青草や山の去年の融け残りの雪がきつミあるだらうミ、一生懸命窓を開けようとして小さい指をさし込まうミするのであつたが、窓はいづかな開かないのだつた。

その時ノツクの音がして、ティネットが首を出し、「朝御飯が出来ました」ミ云つた。ハイディはそれでさうすればよいのかわからなかつたけれど、ティネットがあんまりつんミすましてゐるので訊ねるこも出来ず。ミにかくいつも山でしてゐるやうにテーブルの下から小さな腰掛を出して、隅っこに行つておさなしく待つてゐた。するミ間もなくロツテンマイアさんが物凄いきんまくで這入つて来て、叱りつけた。

「どうしたのです、アデライデ、御飯ださいぶのに、わかりませんか、すぐ来るのですよ」

ハイディはやつミ食堂に行くのだミわかつて、

すぐついて行つた。クララはさつきから待つてゐて、ハイディをやさしく迎へた。クララは今日もまた面白いこゝが始まるだらうと楽しみだつたので、いつもよりすつと元氣さうだつた。今朝はハイディもさてもお行儀がよくて、無事に御飯はすんだ。クララは本箱のお部屋へ又押して行つてもらひ、ハイディもそこで一緒に先生のいらつしやるのを待つた。

「こゝからさうすれば外や地面が見られるの？」
ロツテンマイアさんがゐなくなるまで、早速ハイディはたづねた。

「窓をあけるのよ」

クララは面白さうに答へた。

「だつて、窓が開かないのだよ」

「開くわよ、あんたやあたしぢや駄目だけぢ、セバスチャンにたのめばすぐだわ」

ハイディはこれでやつと安心した。それからクララがハイディのうちのこゝを覗いたので、ハイディは大よろこびで、大好きな山や山羊や花の一杯咲いた谷のこゝを話してきかせた。

幼児心理學 山下俊郎著

四六判布製四三〇頁

定價貳圓五拾錢

送料貳拾貳錢

著者山下先生は本誌にも屢々御執筆いたゞいて居ります斯道の權威者でいらつしやいます。

本書は先生の深い専門的學識と、お二人のお子様をお育てになりました御經驗との織りさなれて出來たご本で、序文にもありますやうにごく平易に書かれてございませう。面白く、興味混々惹きつけられて讀ませて頂く中に、幼児の心理學を教へていたゞいて居ります。

お母様にも、幼稚園の先生方にも是非御一讀をお奨めする次第でございませう。

發行所 巖松堂書店

東京市神田神保町二丁目
振替口座東京六五五六